

第2回世田谷区総合教育会議

日：平成27年7月24日（金）

場所：世田谷区民会館ホール

午前11時41分開会

(スクリーン使用)

保坂区長 それでは、第2部の世田谷区総合教育会議に入ってまいりたいと思います。第1部は汐見先生の御講演、そして先生方を交えたシンポジウム、ありがとうございました。

この総合教育会議は、自治体の長である私のほうで、教育委員の皆さんとともに世田谷の教育のテーマを掘り下げて考える、こういう趣旨で、実はこれが2回目になります。5月25日に第1回目を開催いたしまして、このときには教育委員の皆さんのそれぞれの教育に関する基本的な考え方、そしてこの総合教育会議をどういうふうに持っていくべきなのか、こういった議論をさせていただきました。公開でやっていこうということと、もう1つは、きょうは教育推進会議の御講演とシンポがあってこの会議、皆さんには礼を出していただくという形での参加でしたけれども、次回以降、また教育委員会と御相談をしているのは、先ほど汐見先生からあったお父さんの参加ということも考えて、土曜日に総合教育会議での議論を踏まえて、教育推進会議で今度参加者の皆さんのワークショップ、そういった取り組みも考えております。

今後、たくさんのテーマに具体的に組み組んでいきたいと思いますが、きょうのところは汐見先生の御講演の中にあった、1点目は、自己肯定感、自己有用感、自尊感情ともいいますが、この部分について、そして2点目は、世田谷も含めた学校の教育の中で、時代が求めるような、あるいは汐見先生が御指摘になった日本の子どもたちの変化、もう少し自分で自分を前に押しやるような、そういったところをどうやったら実現できるのだろうかというところ。そして3点目に、とはいっても、当初のグラフにあったように学校への要望とか期待、あるいは注文というのは非常に大きいわけでありまして、そこをスーパーパワーで、校長先生も含めて教員の方たちが全部しよい込めるのかという問題もございます。とても長時間労働で、ほとんど帰ってくるのは夜中で、セブンイレブン状態だというようなことも伝え聞いているところですので、そんな状態では多分よくないだろうと。教員や学校現場をどう支援できるのか、この3点を少し考えてみたいということになります。

きょうは、先ほど司会をされていた澁澤教育委員会委員長、永井教育委員、井上教育委員、原教育委員、堀教育長、そして私が進行をしていきたいと思います。

グラフをお願いいたします。

世田谷の子どもたち、これは「せたホッと」という、いじめや暴力について子どもたちが相談に駆け込める場所をつくっていこうという際に、2600人の小学校5年生、中学校2年生に向けた調査の結果であります。

上のほうを見ていただくと、「自分のことが好き？」、これを自己肯定感としますと、小学校5年生で約半分が「そう思う」と。中学2年になると、これが大分縮みますね。32%というふうに縮んでまいります。そして、「他の人から必要とされている？」という、自分が必要とされているか、自己有用感ですね。こちらのほうは、小学校5年生は「そう思う」が41%と4割です。中2になると、これも31%に縮んでいくということになるんですね。

ここをどう考えるのかということをもまず最初の切り口、テーマにしたいと思います。恐らくこのグラフの変化がどのように、さらに縮んでしまうのでは困るんですけども、そうではなくて、オレンジ色のところが膨らんでいく、そういう子どもたちの環境や子育て、あるいは教育をどう考えられるのかというあたりを、まず井上委員から、データの解析等をされたということなので、お話しいただけますでしょうか。

井上委員 井上です。よろしくお願いいいたします。

この調査は平成23年に行われた調査で、私がした調査ではないんですけども、この自己肯定感・自己有用感のデータは、今、区長が説明されたようなある種、こんなに子どもたちの自己肯定感・自己有用感が低くて大丈夫なのかということを感じさせるデータでもあります。もう1度このアンケート結果に戻って、これ以外の数値がどんなふうになっているかを確認してみたいと思いました。きょうはグラフとしては用意していないので大変申しわけないのですが、気がついたこと、これからディスカッションしていく上で参考になると思われることを口頭で3つ紹介したいと思っております。

まず、上にあります自己肯定感ということですが、「自分のことが好き？」では「そう思う」が小学生52%、中学生32%です。この調査を見ますと、これ以外にも自己肯定感にかかわるような質問でデータをとっております。私が注目したのは、1つは、自己肯定感にかかわるものとしては「得意なことがある」、もう1つは「目標を持って頑張っている」という数値です。これを見ますと、「得意なことがある」のは小学校5年生では86%、「目標を持って頑張っている」も72%あります。これだけを見ると、自己肯定感につながるようなよい面を見ているんじゃないか。中学生でも「得意なことがある」は72%、「目標を持って頑張っている」も62%あります。しかしながら、「自分のことが好き」が「得意な

ことがある」や「目標を持って頑張っている」という数字に比べて低いのはなぜなのだろう、ということを考えなければいけないのではないかなと思います。自分を肯定できるような、得意なことや頑張っているものはあるけれども、トータルには自分のことを好きと言えないような、そういう子どもたちの姿があるように感じました。

2つ目は自己有用感ですね。「他の人から必要とされている？」ということに関してです。これに関する質問は1つありまして、「困っている人を助けてほしい」、そういう気持ちがあるかどうかですが、これは小学生では85%、中学2年生でも74%の子どもたちはそう思っています。とすると、だれかの力になりたいという気持ちはあるんだけれども、しかしながら、なかなかするような場面や機会がないのじゃないだろうか。他人のことを助けたいと思っているけれども、必要とされていると感じる数値は低い、このあたりも考えていかなければいけないと思っています。

これは汐見先生がお詳しいところですが、1980年以降の日本の子どもたちの自己肯定感・自己有用感などを調べたデータでは、外国と比較した場合に、得意なこと、長所、頑張っていること、挑戦心、そういうものがあつたときに、外国の子どもたちはどちらかというとそれが対自分の認識や自己有用感、自己肯定感にストレートにつながっていくような傾向が見られますけれども、日本の子どもはどうもそうでもないようです。日本の子どもは、もう少し複雑で、長所があつたり頑張つたりしているだけではどうもだめで、先ほどの「他の人から必要とされている？」という数値が低いことにあらわれているように、他者との関係性の中で自分を肯定したり、有用さを感じたりという側面がある、そんなことを私は感じました。

3つ目ですけれども、学校生活についてもこの調査では聞いております。「学校が楽しい」という質問に対しては、小学生の76%が「そう思う」と答えている。中学生はちょっと下がりますが、でも73%が「そう思う」と言っている。そういう意味では、子どもたちが一番長い時間を過ごす学校について7割は「楽しい」と答えてくれていることがわかりますが、気になるのは、「自分の意見が言えているか」という聞き方をしますと、小学生では58%に下がってしまうことです。中学生でも52%に、どちらも20ポイントぐらい少なくなってしまう。さらに、「好かれているか」、これはワーディングがちょっとよくわからないんですが、他者との関係で自分が好かれているかということを知っているんだと思うんですが、そういう聞き方をすると、小学5年生で36%しかそう思えない。中学生ではもっと下がって27%。簡単に申し上げますと、「学校は楽しいか」と聞くと7割が

「楽しい」と感じているけれども、しかし、「自分の意見が言えている」では5割くらいになり、さらに「好かれているか」ということになると3割程度に、20ポイントぐらいずつ減少しています。そういうことを考えると、逆に、自分は好かれている、自分の意見を言える、というようなところを高めていくことを考えていく必要がありそうです。

簡単にもう1度まとめますと、「自分のことが好き」「他の人から必要とされている」というデータはこのとおりなんですけれども、その裏にあることにもメスを入れながら考えていかなければいけないと感じました。

以上です。

保坂区長 この2つのグラフだけを見ると、ややどきりとする設問と回答ということになりますけれども、学校が好きだったり、得意なことがあるよと、あるいは頑張っている、目標を持っている、こういった声はあって、一方でというお話でございました。

永井委員に伺いたいんですが、特にこれは世田谷の幾つかの学校でお母さん方、お父さん方と議論したとき、設問が「自分のことが好き？」とありますから、イエス以外の「そう思わない」という人は自分が嫌いなのか、そうとも言えないのじゃないかと。特に中学生ぐらいになると、シャイで、自分が好きと恥ずかしくて言えないんじゃないかという意見もあつたんですけれども、「自分が好き？」というこの回答に関して、PTAの方を通して子どもたちの間で起きている変化をどうお感じになりますか。

永井委員 確かに小学校5年生、中学校2年生となると、だんだん自分と向き合う年齢というものもあると思います。その中で、ちょっと自分が嫌だなと思うところも出てくるところで、好きかと聞かれたらどうなのかな、自分はある程度いい性格していないかもしれないと捉えて、好きというふうに言えない子どもが多いのかなと思うんですけれども。

我が家の話で申しわけないんですけれども、息子が小学校のときに、テストの点数が九十何点と今まであり得ない点数をとってきたときに、多分息子は、「すごい頑張ったね」と言ってくれると思っていたんだと思うんですけれども、「あと2問正解すれば100点だったのに」とそのとき言ったんですね。そうしたら息子が、「いや、俺は頑張って九十何点とったんだ、頑張ったところを褒めてほしかった」というふうに私はそのとき言われたんです。汐見先生のお話を振り返ると、頑張ったところを褒めて、結果はそれについてくるという、ただそれだけというか、頑張ったところを親も本当は褒めなきゃいけない。そして、頑張ったあなたがお母さんは好きだよというようなことを、日常の子育ての中で発し

ていかなきゃいけないというふうに、そのとき思ったんですね。

お母さんに好かれるために、多分子どもって頑張っているんだと思うんです。お父さんもなんですけれども、お母さんのほうがより強い力があるのかなと思うんですが、どんどんそういった子育ての中で、あなたのことをお母さんは、お父さんは好きなんだよ、そのありのままのあなたが好きなんだよというふうなことをずっと言っていくと、恐らく子どもも自分のことが好きになるのじゃないかなと思いますので、多分親のほうも少し勇気を振り絞って、あなたのことが好きだよと子どもに言える家庭で子育てができればいいなと思います。その結果がきっと、小学校5年生とか中学校2年生の多感な時期にも自分が好きだと肯定できる自分が育っていくのじゃないかなと、ちょっとこのグラフを見て思いました。

保坂区長 汐見先生がグラフを出されていましたが、あらゆる調査で、これは別に世田谷区だけでこういう傾向が出たわけではなくて、若者ということで比べても明確な自己肯定感の低下、イエスと言えない若者、子ども時代からそういう変化が始まっているということが言われています。

原委員に、中学校の現場にいらっしゃっていたので、下のほうのグラフの自己有用感についてなんですが、今井上委員からもお話があったように、困っている人を助けたいとみんな思っているんだけれども、実際に助けられているかというとなかなか行動ができなかったりとか、あるいは学校は楽しいんだけれども、自分の意見は必ずしも言えていない、遠慮しちゃう、空気を読むのかもしれない。また、自分がいてもいなくても同じだよというような、ややちょっと寂しい気持ちになっているというあたりについてコメントをいただけますか。

原委員 原でございます。

一般的に中学生という世代は嵐の時代とも言われるんですけれども、発達的に考えると大変バランスの悪いときなんですね。一方で、自我が確立してくる時期でもあります。自分というものを他と比較しながらきちんと認識していく、そういう過程にある子どもたちということを考えますと、困っている人を助けるというような命題に対しては当然正解を持っているわけです。小学校のときからの道徳教育もあるでしょうし、あるいは御家庭でのさまざまな影響も当然あって、困っている人がいたら助けるべきである、自分もそういう人間でありたい、こういう思いはあります。だけれども、では、そういう場に仮に遭遇したとして行動に移せるのか、ここが一番大変なところなんですからけれども、実はなかなか

行動に移すことができない。そして、行動に移せなかったということで、またみずからを責めるようなところもあったりする。人生の中のそういう状況にある子どもたちなんだというふうに私は認識しています。

もう1つには、今、自己肯定感、自己有用感ということでお話ししてきているんですけども、さまざまな国際調査などでも、やはり同じように日本の子どもたちの自己有用感、自己肯定感が低いということはたくさん出ています。実は、私はTIMSSの調査にずっとかかわってきたのですが、その中でも児童生徒、教師に対する調査がありまして、ちょっと質問の文言は違うんですけども、「自分はすぐれていると思うか」ということを児童生徒に聞いています。生徒は中学2年生ですが、この調査より若干高いんですけども、これは2008年調査です。実は、そのとき教師に対しても、「自分は教師としてすぐれていると思うか」という調査をして、教師は若干低いんですね。43%でした。

これを私ども委員の分析の席で、どうしたものかと、どう考えたらいいのかと。ちなみに参加国の平均は、生徒のほうは74%という数字が出ていました。例えば、イランとかコロンビアなんかは90%台の数値が出ていましたし、アメリカでも86%ぐらいの子どもたちが自分はすぐれているというふうに自信を持って答えている中で、日本の子どもたちが45%。確かに低い。

では、本当にすぐれていないのかといたら、そんなことはないです。成績は大変優秀でございましたのでそんなことはないし、先ほどの区長のお話にありましたように、では、自分が好きでなければ自分が嫌いなのかとか、すぐれていないから劣っていると思っているのかという、ちょっと違うのかなというようにも思います。ですから、自分が好きだとか、自分がすぐれているとかと言うことに対する抵抗感のようなものもあるのかな。これは日常生活の中で、永井委員のお話にあったように、周りから好きだよとか、大丈夫、立派だよとか、よくやったねとかと言われなれていない、そういう言葉のやりとりになれていないということもあるのかしらというふうにも私たちは考えました。

保坂区長 続いて澁澤委員長に伺います。このグラフそのものから離れていいと思うんですけども、汐見先生からも、自分が主人公という、わくわくどきどきした子ども時代の遊びの中で、冒険をしたり、ちょっと危ないところに挑戦していったりとか、子どもだけの秘密とか、そういう世界が昔はありました。それは特に大人が用意したわけでもなくて、子ども自身の中で作り出されていったさまざまなトライであり、失敗であり、ある

いは恥ずかしいことでありというような部分が表に出てきたというか。それこそ見えないところが余りない子どもの生活であって、豊かな人間性という中で、もう1つあるとすれば友達という項目があっていいのかなと私は思うんですが、中学生や小学生のころ、友達こそ一番だった気がするんですね。親も大事だけれどもやっぱり友達だ、そういう感覚があって、その中でいろいろ磨かれてもまれていったという気もするんですけども、昔に戻すわけにはいかない。また、吉里吉里のような、みんな顔が見えている社会とも違う世田谷で、どのようにしていったらいいのか、お考えを聞かせてください。

澁澤委員長 済みません、委員長ということで最後に回ってきちゃったのですけれども、ここの部分は僕も委員長として言う資格は全くなくて、自分個人として言わせてもらおうと、実は私、だめなほうだったのです。自分が好きじゃなかったです。目立ちたがりですね。1つ大きかったのは、私の仲のいい友人が小学校5年のときに自殺したのですよ。これは猛烈に大きかったです。みんな、やはり中学になっても自殺を考えました。自分は生まれてきた意味があるのだろうかとか、一体何のために生まれてきたのだろうかとか、随分考えて、非常にネガティブになっていました。

そのとき、今の区長のお話じゃないのですけれども、僕が自殺しなかったのは、私は木登りがうまかったのです。それで、木登りがうまいと言ってくれる連中がいたのです。それがすごく大きかった。今の子たちに木登りが評価されるかといったら、多分評価されることはなくて、その辺は一体どうしたらいいのだろうかということを今区長のお話を聞きながら思っていました。

それともう1つ、他人から必要とされるかということは、これはもう圧倒的に私はイエスだったのです。それはなぜかということ、圧倒的に自分のばあさんが私のことをかわいがってくれたのです。おふくろはうるさかったです。おふくろは勉強しろとか何とかかんとかと言っていましたけれども、ばあさんはとにかく誰に会っても孫の自慢だったのですね。無償の愛というものは本当に気持ちよかったし、何かに包まれている感じがありました。母親の愛とかというのがわかってくるのは、やっぱり男の子ってませていないからかもしれないが40歳過ぎてからで、私も本当にそうなのですよ。自分を好きになったのも40過ぎてからですし、それまでは嫌なやつだと自分を思っていましたから。

そのとき、友達関係とか、無償の愛とかを与えてくれる、考えてみるとその部分の社会の多様性というのは、効率だけを追いかけてきたためになくしてきたのかなというようなことを、個人として非常にショックを受けながら見させていただいております。

保坂区長 それでは、委員長が個人としてのお話なので、教育長も少し個人として。

堀教育長 朝早くからおつき合いいただきありがとうございます。汐見先生のお話からここに至るまで、自画自賛してはいけないんですけども、大変有意義な時間を過ごさせていただいているなと思っております。もしかして汐見先生がそろそろお帰りになるかもしれませんので、1つだけお願いがあります。最後にミッションという形で、お父さんにも、働いているお母さんにも参加していただくような時間帯でということがありましたので安心したんですが、乳幼児期の子育てには99.9%母親が携わっております。余りいろいろこういう課題、ああいう課題と言われますと、母親が萎縮します。これを何とか解消してあげたいと思っております。

今、世田谷区では子育てひろばが16カ所ぐらいあるんですが、無料で使えます。ですので、保育園に行っていない親たちも、そこに行っているんなストレスを親同士が解消しながら子どもたちの育ちを見ているという状況です。そういうものを今世田谷区がつくっておりますが、子育ては母親だけではない、男性がもっとかかわらなくてはいけないというふうに思っております。最後にミッションとしていただきましたので安心しましたが、ぜひ汐見先生に今後ともよろしくお願ひしたいと思ひます。

保坂区長 パワーポイントを進めてください。

汐見先生が次の場に行かなければいけないということで、先生のお話もありましたけれども、これから多様な学びや、教育をさらに改善していくことを話し合っていくんですが、今までのところをお聞きになったコメントを一言いただきたいと思ひます。一番前に座っていらっしやいます。

汐見 きょうは、キーワードとして自己肯定感とか自己有用感というのがありました。実は、時間もなかったので余り詳しくその話をしなかったんですけども、これが低いということについてはどう読むか、すごく論争があるんですね。今おっしゃってくださったように、日本の子どもは自分にいいところがあるということをちゃんと主張しなきゃだめだというふうには育てられないんですね。

例えば、私の真ん中の息子は自分で高校受験は意味ない、受けないなどと言って、どうするかと聞いたらイギリスに行くと言って、1人でイギリスに行ってしまうと高校は向こうに行っちゃった。そのときに、向こうの普通のパブリックスクールに行ったんですけども、全寮生活ですからね。やっぱりアジアから来た人間に対するいじめ、差別というのが最初はすごいんですね。ところが、例えばバスケットが好きで、バスケでかなり格好

いいことをやると、「おっ、あいつできるじゃん」というようなことになって、途端に評価が変わっていく。それで、あいつはこういういいところがあるとか、それを今度は主張すると評価ががらがらと変わっていくのがおもしろかったと言うんですよね。

これは僕はいいとは思わないんだけど、文化が違いますよね。つまり、自分にいいところがあればそれを主張しなければだめだという文化と、自分はこれが得意なだけども、言うちょっと目立つしなという文化の中では、同じような力があったりメンタルがあったとしても、それを自分でポジティブに評価しているか、ちょっとってはどうかという気持ちがあるかによって、アンケートの結果はかなり違ってきますよね。ですから、データほど日本の子どもは自尊感情と言われているものがすごく低いというふうには余り見なくてもいいんじゃないかと一般的に言われている。

ただし、例えば引きこもっている若者がすごく多いというのは、日本独特の現状なんです。十二、三年前かな、私の知人が国際会議で、日本の若者は少なくとも数十万、場合によっては100万の単位で学校に行けなくて、あるいは社会に出られなくて苦しんでいるという報告をしたときに、その国際会議場が大騒ぎになった。どういうことかという、何ですかその若者は、どういう若者ですかと、イメージできない。どうして家から出られないんですか、誰が食べさせているんですか、追い出せばいいじゃないですかと。欧米にはいないんです。だから、イメージできないというわけです。それで、親が食べさせていると言うと、そんなばかなという話です。

それで、どうも子どもが家から出られなかったら母親がかわいそうにねなんて思ってしまう儒教文化的な国だけで起こっていることなのかなと。韓国だとか台湾にもあるわけですから。そういうことがあってどうも単純ではないんですが、受験教育で尻をたたいている国にたくさん出ているということは事実なんです。そして、引きこもっている若者たちをずっと回った私の知人のカウンセラーがいて、とにかく共通に言っていたのは、子どもころから母親に深く愛されたなという感情は持っていないということでした。要するに、受験の世界に乗るか乗らないかによって評価されてしまうということで、やりたくないよと言ったら、どうして、だってこうこうこうじゃないというときに、そうだよ、そういうときってあるよねとか、さっき言った90点とってきたら、あとちょっとだねと言うのじゃなくて、何であと10点とれなかったのと言われてしまというね、ごめんなさいね。

そういう中で、だめな自分を出したときに受容される、やりたくない自分を出したときにも、そういうときってあるよねというような形で、全体を愛されているという感覚が弱

くなることは、僕はちょっとリスクだと思っているんですね。人間を丸ごと、うちの子
ったらこういうとき全然やる気がしないって、もうしょうがないわねというぐらいで、実
はそういう子どものことをどこかで認めているというような感じ。それは別に僕は家庭と
か学校とかというのは、家庭だけで家庭があるのじゃなくて、社会のいろんな問題がいろ
いろ形を変えて出てくるところが家庭だと思っているんですね。学校のやり方は、例えば、
企業がこういう人間を求めているからこういうことになっているということがあって、学
校が決められることなんてちょっとしかないと思っているんですよ。

ですから、そういうのを変えるためには、例えば企業社会でいじめがないのかといっ
たら実はたくさんあるわけだし、叱咤激励ではなくて罵声がいっぱい飛んでいるわけ
ですから、そういう体験をしているお父さんが、家へ帰ってそこだけですごく子ども
に対して優しくなるなんてなかなか難しいですよ。だからといって、どこかから
変えていかなきゃ無理だと思うんですが、そういうことのさまざま、つまり日本
社会が企業社会としてワーッと突っ走るために、単身赴任だとかいろ
んな形で家庭を犠牲にしてきたとか、そういう問題が全て、子どものあり
のままの自分でいいじゃんという、いいところがいっぱいあるじゃん
という、それは親がまず認めてくれているよという感覚の弱さとなって、
それが引きこもりみたいな形で出てきているということは、日本の独特
の問題なのかなと思うんですね。

ですから、余り自尊感情が高いとか低いとかということで議論するよりは、
子どものありのままをもっと大事にしていこうという、こうやって難しく
なっていく社会の中で一生懸命生きているんじゃないかと、こいつら
が次の時代を担ってくれるんじゃないか、もう彼らにかけよう
じゃないか、そういう思いで見えていくということがもう少し広がって
いく、そういうきっかけになればいいと思っていますね。（拍手）

保坂区長 ありがとうございます。汐見先生、本当にきょうはありがとうございました。
（拍手）

残りの時間、テーマを進めていきたいと思います。

自分が主人公、恐らく知識の総量というよりは、その知識の総量の外側にある自分
に対する信頼だとか、落ち着きだとか、いろんなものに柔軟に対応してきた経験に基づいて
一定の自信があったりすると、勉強が伸びていたり、あるいは社会に出てからの仕事など
もいろいろ作り出したり、新たな状況に対応することもできるようになると。多分20年
前の日本社会だと、大きな名前がついている企業は絶対不変だから、半世紀、100年はある

から、そこに入ることがある種の人生の勝負であって、入ってしまえばあとはこっちのものというか、そういう考え方もあったかと思いますが、今やそんなことはとても言っていない時代になったと。非常に変化が激しいし、いつ何が起きるかわからない、地球環境の問題も含めてですが。

では、井上委員にまたお話を伺いたいですけれども、こちらにある主体的に学習に取り組むとか、個性や能力を伸ばす、みずから学び、考え、問題を解決していく。教育委員会の皆さんと学校長の方々と昨年オランダに行く機会がありました。徹底して個人で、生徒が全部時間割を決めて、クラスの中で生徒1人が決めた時間割の中で、グループに分かれて個別化教育というんでしょうか、イエナプランという学校も見てきたり、随分違うんだなと思いつつも、そういう学びの様式ということと、また一方で世田谷の教育の中でも随分参加をさせていただいていることの中で、これからの改革についてお話を伺えればと思います。

井上委員 きょうの汐見先生のお話の中でも幾つか出てきたと思うんですけれども、主体的に取り組むというのは今とても大事にされていることですが、その「主体的な」というときに、きょうのお話にあった「人間の中にある自然」というような、その人が、「あっ、これが自分なんだ」というところまで掘り下げていったときの主体性ということを考えなければいけないのではないかと。「君は何をやりたい？ ではこれをやって」ということよりも、そのクラスの中において、「自分はここにいる、こういう自分でいていいんだ」というふうに気持ちで感じるというか、非認知的という言葉がありましたけれども、「ここで自分が勉強していくことは、自分にとってとても居心地がいいな」----言葉にはできなくても、そういうような気持ちの中で、その人の「主体的な学習」というのを考えていくということがとても大事になるのじゃないかなと思いました。

それから、多分イエナプランなんかでもそうだと思うんですけれども、個でやる場面と、それから共同でやる場面というのがかなり意識されてつくられている。勉強というのは1人でやるものだというふうに何となく子どもたちは思い込むようにならされています。例えば、試験のときはカンニングしちゃいけない、レポートを書くときは人のを見てはいけない。でも、みんなで何かつくっていくときは、知らないことは早く聞いたほうがいいし、友達のノートを見てよければ、それを参考にして一緒に何かつくっていったらいい。そういう意味で言うと、自分のやりたいことをやるためにも、友達と一緒にやっていくというような場面を、今いろんな学校で共同で学習するということが大事にされていますけれど

も、そういったものをもっと取り入れながら、先ほどの話にもあったプロセスを大事にしていく。何ができたかということよりも、何がやりたいのか。どういうものに興味を持って、どんなことをしていくことによって、自分は何ができるようになったのか。そういうところをもっともっと大事にしていくということがここに書かれている「主体的に学習に取り組む 個性や能力を伸ばす みずから考え、よりよく問題を解決する」ということの背景にあるものではないかなと感じています。

保坂区長 今時計を見たら、残り10分。まだまだ序盤という気持ちでやっていましたら、大分時間がたってきました。

では、ちょっと残り時間が少ないんですが、二、三分で御発言を受けていきたいと思えます。永井委員、今と同じ、学校教育の中でここがこのように変わればということで、何かあれば。

永井委員 私は保護者としての視点でしか話ができないんですけども、個性ということとはよく言われますが、他者を受け入れるという環境がなければ、個性ってなかなか自分から表現することができないんじゃないかなと思っています。クラスの中で、みんな同じ意見なんだけれども、1人だけちょっと違う考えを持っている、それを自分の意見なんだよというふうにそこで自信を持って話ができる環境づくりをしていただければ、ほかの子と違う考えでいいんだよという、他者を受け入れる、先生だけじゃなくてそのクラスで学ぶお友達、そしてクラスだけじゃなくて学校で自分が本当にやりたいこと、自分が考えていることを自信を持って話ができ、そしてそれを受け入れてくれる先生やお友達がいるというような環境づくりをぜひしていただきたいなというふうに思っています。

保坂区長 続けて、澁澤委員長、お願いします。

澁澤委員長 ちょっと違う視点かもしれませんが、ブータンの国王が来られたときに、先ほど区長がお話しになったように、幸福度という話を言われました。ブータンの幸福度というのは、人と人との関係が良好であり、人と自然の関係が良好であり、そして世代と世代の関係が良好であることをもって幸福というのがブータンの定義です。それを何とか、これからの豊かな社会の尺度として、そのとき内閣府も国交省も日本の幸福度的尺度を施策の中に導入しようと思いました。その時私は国交省半島室の委員をやっており、同じように地域活性化を図る尺度に幸福度を入れる試みが出ていたのですけれども、全部それは実現しなかったのですよ。何で実現しなかったかという、最後のところで財務省に行くと、費用対効果はどうですかと聞かれるのです。つまり、今の日本という国は1回

お金に翻訳しないと価値と認められないということが嫌というほどわかったのです。

その意味では、かつては我思うゆえ我ありでデカルト的であったのですが、今はそれこそ関係性という中に自己が存在するのだということをおぼれている社会学者のほうがはるかに多いわけで、関係性というものはお金に翻訳できない、数値に翻訳できない。それならば、それを教育の現場で、価値として落とし込む必要があると考えます。日々日常のカリキュラムに追われている先生方だけにそれを投げかけるというのは物すごく酷な話なので、次の教育センターの話にもなるかもしれませんが、それをサポートするシステムが必要となる。今の社会では価値がないけれども、これからこの子たちが生きていく時代には絶対価値になっていくというような、それはお金には翻訳できないけれども絶対重要で伝えなければならないのだということを、教員も、それから保護者も、それから私どもも認識をしながら、行政がサポートしながら、それを世田谷では実現していくということが望まれる時代かなと思っています。

保坂区長 続きまして、原委員、いかがでしょうか。

原委員 私は、前半の汐見先生のお話の中で、ブラックボックス化しているということのいろいろなお話で、無理な発想をしてもおかしいと感じないというお話があったときに、ああ、まさにそれだなと感じたものなんですね。今、学校の中で課題解決的な学習、みずから課題を見つけ、解決を図っていくという学習の方法はかなり広まってきていると思います。ただ、実際に問いと答えの間が充実していない、こういう現実もあるのかなと思いますので、学校の指導の中でもこの問いと答えの間、どういう道筋でその解答に至ったのかということを経験者たちの言葉で話をさせる。それは、多分多様なものになると思うんですね。それを、毎時間じゃなくてもいいんですけども、お互いに認め合えるような子どもたちの中の関係づくり、これを頭に置いて課題解決学習を経験させていっていただきたいなというふうに考えます。

保坂区長 パワーポイントを進めてください。

大変にこのシンポジウムは欲張ったのかなという感じなんですけれども、本来教育を支えていくということで、学校現場や教員を支える仕組みの新教育センターの構想をしっかりと立てていこうというところに引きつけて、教育長のほうから発言をお願いします。

堀教育長 先ほど汐見先生のところでちょっとお話ししそびれた件ですが、自己肯定感という件では、私は現場を束ねる人間として、教師たちの自己肯定感、教師自身が自信を持つ、そういうような環境をつくっていきたいと思っています。これは、保護者の力で

もあり、地域の力でもあり、学校長を初め学校関係者の力だと思っております。大学を卒業した教員が自信を持って対応できるというのはなかなか難しい環境にあります。こういう教員にぜひいい教育をしてもらいたいと思っておりますので、これは教員の自己肯定感をぜひ高めてほしいということが1つあります。

それと、今の区長の話ではありませんが、今教育センターがございまして、これからの時代に対応する新しい形の新教育センターをつくりたいと思っております。それは、教員の研修だけではなく研究、学校を支援する、それと、きょうお話がありました幼児教育、そちらのほうにも視点を置くというところで、新教育センターをつくっていきたいと思っております。

また、もう1つ新教育センターと同時に、来年から障害者差別解消法が始まります。それに向けてインクルーシブ教育を各学校で対応しなくてはなりません。個性の豊かな子どもたちがふえていきますが、ぜひ早いうちに自分の個性を見きわめて、自分に自信があるというような環境をつくっていきたいと思っておりますので、ここで区長にお願いですが、ぜひ予算をつけていただければと思っております。よろしくお願いします。（拍手）

保坂区長 時間に追われるなという話を時間に追われながらしているということで、大変申しわけありません。という、この教育センターのところは、きょうはこういう課題がありますよというところを出したにとどまるのかもしれませんが。

オランダで見てきた教育支援センターは、世界中の教材をベテランの先生、そして教育学者のスペシャルチームが収集して、非常にカラフルな色分けをされた、ストックの量もすごいですね。そして、例えば障害のある子に対してこういう教材がいいよと、その障害も、どこでどうつまづいているのかということを手際よく聞いて、その子に即したものを出していく。あるいは、このクラスはなかなか授業がうまくいっていないよといったら、その教育支援センターのベテランの指導員が場合によったら学校に行って、こういう教材とスキルを使って授業をやってみたらどうだろうかというような助言もする。また、地域の学校の先生方が水曜日は研修日で、教育センターに来て勉強会をするなど、非常に玉手箱的な、何かたたけばいろんなものがでてくると。

そういう意味では、地球全体で教育、学校という形は一見変わらなくても、中身が随分今ダイナミックに変わり始めているなということを感じております。

きょうの汐見先生のお話、そして教育課題のお話も挟んで、そしてこういった教育センターというものをいかにつくっていけばいいのか、それは箱だけができればいいのかというも

のでは絶対ないわけです。いきなりできるものでもないだろうというあたりは次回以降の課題にいたします。

あと、この総合教育会議では、障害を持つ子どもたちもたくさん世田谷にはいて、学校に通っています。障害を持つ子どもたちをめぐる特別支援教育のあり方も、来年度大きく変わります。それについて、その変化が子どもたちにとってよりよいものになるのかどうか、しなければいけないわけですが、そのことをしっかり深めて、区民の皆さんとともに考えていくことも必要だなと思っています。

などなど、たくさんのテーマがありますけれども、本来ここまでお話しして、きょう御参加の皆さんで、少し休憩しながらテーブルを囲んでワークショップというふうに行っていくと、先生方と保護者の方と、あるいは教育に関心を持つ方が世田谷区民ということで、世田谷の学校教育を中心に、学校以外の地域の力も、あるいは子育て支援ということも力を入れてやっています。多分自己肯定感の話などは乳幼児の子育てから、今汐見先生が言って帰られましたけれども、引きこもりの若者支援の若者支援策も世田谷区では昨年取り組んでいます。多分、これは一つながりで議論されるべきテーマかと思いますが、第1回のマッチングというよりはドッキングの取り組みとして、教育推進会議と、そしてこの総合教育会議の議論が時間となりましたので、今回はこれでおしまいにして、次回以降、さらに充実させた議論をしていきたいと思っています。

教育委員の皆さん、ありがとうございました。参加者の皆さん、ありがとうございます。
(拍手)

午後0時34分閉会